

## 「JENESYS2.0」アジア国際子ども映画祭 2016 参加訪日団

### 参加者の感想（抜粋）

#### 【中国高校生の感想】

○この活動に参加する前、日本人は中国人に偏見を持っているのではないかと心配していたが、まったくそんなことはなかった。みんな、とても友好的だった。

一番印象深かったのは、出会ったどの日本人も、とても友好的で温かかったことだ。映画祭の交流会では、18歳の日本の女の子と少しお話をした。言葉はあまり通じなくても、その後、私の姿を見るたび、その子は人混みの中でも私の名前を呼んでくれたことに、私はとても感動した。

今回の映画祭では、優れた作品をたくさん観ることができた。ストーリーが面白いもの、テーマが重々しいもの、私の知らない東南アジアの文化が反映されたものなど、思いもしなかった内容の作品たちだった。映画祭に参加している生徒たちと交流し、国や文化的背景が違っても、みんな映画を愛していることに気がついた。作品を作る過程については、テーマに合わせて撮ること（私はこれが嫌い）、子どもらしい視点で撮ることを大事にすることという2点は、これまで気にしたことのない経験だった。

帰国したら、友だちにこの旅のことを話したい。訪れた場所のこと、出会った日本の生徒たちのこと、映画祭で観た感動的な映画のことなどを話すと思う。

○日本人は、私が想像していたよりも、もっと温かくて、付き合いやすい人々だった。一度きりの出会いの人も、踏み込んで交流ができた相手も、みな親切でもてなし好きだ。日本人が外国の要素や文化を受け入れる包容力は、日本を訪れるまで感じることのなかった面だ。

今回の旅の目的はアジア国際子ども映画祭への参加だったので、一番楽しみにしていたことは各国代表の作品を観ることだった。でも、見終わったあとの感覚は、自分が想像していたものと違っていた。一番シンプルなテーマが人を感動させ、心から良いと思える映画になるのだ。これは私たちが一番考え直す必要がある点だと思う。

○映画の神髄は、技術的な熟練度や映像の美しさにあるのではなく、その作品が表現している人間的な思いやりや優しさ、そして考え方にある。これは、今回の映画祭に参加して私が教えられたことだ。映画祭が終わったあと、日本の学校（東京都立葛飾総合高校）を訪問し、より一層、日本の社会ではそんな人間的な思いやりをいたるところで目にするのを感じた。少人数クラスでの教師の生徒に対する思いやりや、クラスメートが発言するたびに贈られる拍手の音がとても印象に残っている。これらは、このプログラムに参加した収穫だ。

今回の訪日で一番印象に残っているのは、映画祭のウェルカムセレモニーで各国の代表と対面したとき、日本の高校生が自主的に私たちに声をかけ、交流しようとしてくれたことだ。日本の高校生の、外国の文化を知ろうとする熱意と好奇心を感じた。その後の東京都立葛飾総合高校の訪問では、生徒たちと言葉は通じなかったものの、楽しくコミュニケーションをとることができた。日本の高校生は、必ずしも私が想像していたような恥ずかしがり屋ではないと気づいた。日本だけではなく、親切なマレーシアやカンボジアの生徒たちとも、映画を愛するという共通の想いをもって一堂に会することができた。中国では往々にして、いろいろなメディアの情報から、他国の文化にステレオタイプなイメージを抱いたり、誤った理解をしてしまうことがある。しかし、実際にいろいろな国の人と接してみなければ、彼らを育んだ風土や人情、そして文化を理解することはできない。